

保育が子どもの発達に及ぼす影響に関する研究

平成13年度厚生科学研究1：保育効果に関する縦断的研究

上智大学 網野武博

・研究目的

乳幼児期からの保育は、プラスかマイナスかを実証的に研究

乳幼児の保育所入所の始期、期間、保育の質、家庭との連携等が、乳幼児期及びその後の児童期、青年期さらには成人期に及ぼす影響を多面的に、縦断的に調査研究し、今後の保育所のケアのあり方、家庭や地域との連携のあり方、母子関係・父子関係、愛着関係のあり方等に関する課題並びに展望について検討を加えます。

・第1年度の研究方法

対象とした文献は、国外研究約90点、国内研究約50点 計約140点

第1年度は、諸外国及びわが国におけるこのテーマに関する文献検索を行い、類型化の上、主要な文献を収集し、文献考察をすすめました。

・結果

1. 類型別検索文献状況一覧

保育の影響をプラス=、マイナス=×、どちらともいえない=として判定しました。

| | |
|-----------------|---|
| アタッチメント研究的アプローチ | 初期の研究では×も見られたが、全体としてが多い。近年では、保育者とのアタッチメントが安定していればとの報告も見られる。 |
| 縦断研究的アプローチ | が多い。 |
| 認知発達のアプローチ | ×は非常に少なく、が比較的多い(ただし長期的にはのものが多い)。とくに教育的介入計画に基づく研究ではほぼ全て。 |
| 行動発達のアプローチ | 初期の研究に×が数件見られるが、特に最近の研究ではが多い。は保育の質が高い場合という条件のもとで多い(保育経験の有無がというものは非常に少ない。) |
| 総合分析的アプローチ | が多い。 |

2. 概要

母性神話・三歳児神話を超えよう！

乳幼児期から母親が就労すること、乳幼児期から母親から離れて保育を受けることについて、一般的に「子どもにとってよくない」という見解が多くみられます。しかし、これまでのとくに縦断的なアプローチを加えた客観的、科学的研究を精査した結果からは、マイナスの影響あり(×)とする結果は非常に少ないことが、あらためて示されました。「でも、三歳までは母親が育てるべき」という通念にとらわれることのマイナスをも同時に考慮し、母性神話、三歳児神話や保育是非論を超えた子育て観、子ども観の確立が求められます。

(母)親へのアタッチメントも保育者へのアタッチメントも大切！

保育を体験することは、すなわち主要なアタッチメント対象である親との分離を体験することです。しかし、多くの先行研究において、保育を受けることそれ自体が親子のアタッチメントを阻害するという知見はほとんど得られていません。保育を受けている子どもは、家庭の中で親とかかわるだけでなく、保育者との相互作用を日常的に経験し、保育者へのアタッチメントを形成しています。したがって、このような子どもの発達を論じるには、親子のアタッチメントのみならず、保育者へのアタッチメントおよびその形成にかかわるケアの質(および保育環境)について同時に検討することが重要です。

乳幼児期からの保育は、知的な発達や行動問題にストレートな影響を及ぼさない！

乳幼児期からの保育の経験そのものが、その後の問題行動(友達に対する攻撃的な行動など)に直接影響を及ぼすということはないとされています。むしろ、保育の質、とくに保育者との関係のあり方が非常に大きな要因となることが多くの研究から指摘されており、保育の質の高さのポジティブな影響に関しては様々な知見が得られております。また、保育の知的な発達への影響に関しては、長期的には差は減少していくものの概ねポジティブな結果が示されており、特に家庭環境が知的刺激に乏しい場合に有意義であるという知見が得られています。

・考察

どの子どもにとっても“ケアの質”が大切！

第1年度研究から言えることは、乳幼児あるいは乳児早期に、親(とくに実の母親)とともに家庭で過ごしたか否かという、単純な変数のみで判断することは、全く科学的ではないということです。この時期の子どもたちにとって最も重要なことは、家庭養育環境におけるケアの質、保育環境におけるケアの質、そして対人関係における応答性豊かな、また感受性豊かな、人間的相互作用であるということです。そのことに、家庭も社会も保育者も留意することが重要であると思います。